

博士学位論文審査要旨

2008年11月21日

論文題目： 自己愛人格傾向のパーソナリティ構造とそのストレス過程の検討

学位申請者： 小西 瑞穂

審査委員：

主査：	文学研究科 教授	佐藤 豪
副査：	文学研究科 教授	内山 伊知郎
副査：	文学研究科 教授	青山 謙二郎

要 旨：

本論文は、自己愛人格傾向のパーソナリティ構造とそのストレス過程に関する研究である。自己愛人格傾向とは現代青年を中心に見られる人格特性の一つであり、強い自己肯定感に起因した誇大感を有し、顕示的で自信過剰な態度を示し、他者からの注目を求め、外見への美しさに耽溺しているといった特徴が挙げられる。

本論文は全体で6章から構成され、論旨の展開は以下に示す通りである。

第1章では、自己愛人格傾向が青年期に見られる人格特性であること、またその延長線上にある自己愛性パーソナリティ障害との関連性を論述し、現存する自己愛人格傾向の測定尺度の問題点について指摘している。

第2章では、近年米国での自己愛人格傾向の測定に盛んに用いられている Raskin & Terry (1988)の Narcissistic Personality Inventory (以下NPI) を邦訳し、新たな日本版自己愛人格傾向尺度を作成する過程を記述している。その結果、5因子構造 35項目の Narcissistic Personality-Inventory-35 (以下NPI-35) を作成し、それらの因子的妥当性、内的整合性、再検査信頼性、構成概念妥当性を確認し、NPI-35 が自己愛人格傾向を測定する際に実用可能な尺度であることを検証している。

第3章では、自己愛人格傾向と両親の養育態度や自我状態、positive illusion との関連を検討し、その特徴の明確化を行っている。その結果、青年の自己愛人格傾向には幼少期の父親の養育態度が大きく影響すること、男女共に権威的、支配的、排他的な自我状態や他者への配慮に欠け、自分勝手な行動をとりやすいといった特徴を示す自我状態が自己愛人格傾向を促進することを明らかにしている。さらに自己愛人格傾向の高い者は positive illusion を抱いていることを示している。

第4章では、自己愛人格傾向のストレス耐性について素因-ストレスモデルを用いて検討し、自己愛人格傾向がストレスに脆弱な素因となり得る可能性を示している。またその一方で、ストレスラーの少ない状況では、自己愛人格傾向の高い者はストレス反応が少なく、自己愛人格傾向が精神的健康を支える役割のあることも示唆している。

第5章では、対人ストレス状況、社会的評価状況、身体的脅威状況における自己愛人格傾向のストレス過程を検討している。対人ストレス状況では、自己愛人格傾向の高い男性はポジティブ関係コーピングによりハッピーネスを向上させるが、女性の場合にはコーピングを媒介して精神的健康に与える影響は認められていない。また社会的評価状況および身体的脅威状況では、男女共に自己愛人格傾向の高い者はストレスラーをコントロール可能と認知的に評価し、積極的な対処を行うことを示している。

第6章では一連の研究についてその研究結果の意味するところを概括しながら、これらの研究

の限界について論述している。また今後の研究課題について述べ、さらに自己愛人格傾向への介入についての展望を本研究の成果を踏まえて述べている。

以上のように、本論文は自己愛人格傾向について、その測定方法の確立、自己愛人格傾向の形成に関連する要因の検討、ストレス過程との関連を広く実証的に研究したものとして評価できる。

これらの研究成果から、本論文は博士（心理学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2008年11月21日

論文題目： 自己愛人格傾向のパーソナリティ構造とそのストレス過程の検討

学位申請者： 小西 瑞穂

審査委員：

主査：	文学研究科 教授	佐藤 豪
副査：	文学研究科 教授	内山 伊知郎
副査：	文学研究科 教授	青山 謙二郎

要 旨：

上記審査委員3名は、2008年11月18日（火）午後7時30分より2時間にわたり学位申請者に対して総合試験を行った。

学位申請者は提出論文に関して、審査委員からの専門的質疑に対して、適切な応答と説明を行い、本論文の学術的価値を証明した。また申請者は、本研究の基礎となるパーソナリティ心理学、健康心理学についても十分な知識を有することが認められた。

さらに、申請者は語学（英語）においても十分な学力を有することが確認された。

以上の総合試験の結果より、学位申請者は博士（心理学）（同志社大学）の学位に相応しいものと認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 自己愛人格傾向のパーソナリティ構造とそのストレス過程の検討

氏名： 小西 瑞穂

要旨：

本研究では、自己愛人格傾向のパーソナリティ構造をより明らかにし、そのストレス過程を検証することを目的として、様々な変数との関連から検討を行った。自己愛人格傾向とは強い自己肯定感に起因する誇大感を有し、顕示的で自信過剰な態度を示し、他者からの注目を求め、外見への美しさに耽溺しているという特徴を有する人格特性である。この自己愛人格傾向の延長線上には誇大性、賞賛欲求、共感性の欠如などを特徴とする自己愛性パーソナリティ障害 (DSM-IV-TR ; American Psychiatric Association, 2002) が存在していると考えられる。

そこで、本研究では第1章において、自己愛人格傾向研究についての理論的背景を示し、その経緯や問題点を述べ、次章以降の研究への導入を行った。次に、第2章では、既存の自己愛人格傾向を測定する尺度について概観し、その問題点や課題を示し、新たな自己愛人格傾向尺度を作成することを試みた。現在、我が国に存在する自己愛人格傾向の測定尺度は様々な研究者によって検討され、独自の回答方式や因子構造が報告されており、加えて十分に信頼性や妥当性を検討した尺度が存在しないという測定尺度上の問題点が多い。また、自己愛人格傾向の延長線上に存在すると考えられる自己愛性パーソナリティ障害の特徴を十分反映した尺度も見あたらない。そこで、近年米国での自己愛人格傾向の測定に盛んに用いられている Raskin & Terry (1988) の Narcissistic Personality Inventory (以下 NPI) を邦訳し、新たな日本版自己愛人格傾向尺度を作成することを試みた。この Raskin & Terry(1988)の NPI の利点としては、多様な因子を含み、自己愛人格傾向の構造を多角的に捉えることが可能であると同時に、従来の NPI に比べて項目数が少ないという点が挙げられる。この日本版の尺度の作成には、自己愛人格傾向の延長線上に自己愛性パーソナリティ障害が存在すると考えた場合に、美しさなどの外見に耽溺し、誇大感を有し、他者からの注目を求め、顕示的で自信に満ちているように見えるといった臨床場面で診る患者の特徴や DSM-IV-TR(APA, 2002)に示される診断基準に関連した特徴を含めることを目的とした。そして、調査1では探索的因子分析によって5因子構造35項目の Narcissistic Personality-Inventory-35 (以下 NPI-35 と略記する) を作成し、それらの因子的妥当性、内的整合性、再検査信頼性、構成概念妥当性をほぼ確認し、自己愛人格傾向を測定する際に実用可能な尺度の1つを作成した。NPI-35 の特徴としては、比較的少ない項目で、自己愛人格傾向の5つの側面を評価できること、またその側面には自己愛人格傾向の延長線上に臨床場面で見られる自己愛性パーソナリティ障害の特性が存在しているという点が考慮されていることが挙げられる。以下の研究ではこの NPI-35 を使用し、研究を進めた。

第3章においては、自己愛人格傾向と両親の養育態度や自我状態、positive illusion との関連を検討し、その特徴をより明らかにすることを試みた。両親の養育態度との関連からは先行研究で述べられてきた母親の影響ではなく、父親の影響が認められ、青年の自己愛人格傾向には幼少期の父親の養育態度が大きく影響することがわかった。さらに、個人の思考や行動・感情のパターンを規定する自我状態との関連から、男女共に権威的、支配的、排他的な自我状態や他者の配慮に欠け、自分勝手な行動をとりやすいといった特徴を示す自我状態が自己愛人格傾向を促進することが明らかになった。加えて、女性においては冷静に判断し、物事を現実的・客観的に捉えることが自己愛人格傾向を高める要因となり得ることも示唆された。次に、自己愛人格傾向と positive illusion との関連から、自己愛人格傾向と自己に対する positive illusion という2つの概念は非常に関連が深く、自己

愛人格傾向の高い者は *positive illusion* を抱えていることが明らかになった。さらに、自己愛人格傾向の高い女性の場合にのみ言えることだが、イリュージョンを媒介して一部のストレス反応を抑制する働きが認められ、イリュージョンを利用してストレスに対処している可能性も示唆された。また、自己愛人格傾向は直接的に精神的健康を向上させる要因になることがわかった。

第4章では、自己愛人格傾向のストレス耐性について素因-ストレスモデルを用いて検討し、自己愛人格傾向がストレスに脆弱な素因であることが明らかになった。そして、自己愛人格傾向の高い者がストレスに遭遇した場合に男性では抑うつや自律神経系の活動性が亢進するストレス反応、女性では身体的疲労感といったストレス反応を生じやすいことが見出された。その一方で、ストレスの少ない状況では、自己愛人格傾向の高い者は自己愛人格傾向の低い者や平均的な者に比べて最もストレス反応を示さない、良い精神的健康状態にあることが明らかとなり、自己愛人格傾向の精神的健康を支える役割も示唆された。さらに、自己愛人格傾向とあいまいさへの非寛容との関連を検討した結果、自己愛人格傾向が友人関係におけるあいまいさへの非寛容を促進することが明らかとなった。また、女性の友人関係に限定はされるものの、自己愛人格傾向があいまいさへの非寛容を媒介した場合に一部のストレス反応を抑制する働きも認められた。

第5章では、3つのストレス状況、つまり、対人ストレス状況、社会的評価状況、身体的脅威状況を設定し、各ストレス状況における自己愛人格傾向のストレス過程を検討した。対人ストレス状況では自己愛人格傾向の高い男性は積極的に関わって良好な対人関係を築こうとするポジティブ関係コーピングを行った結果、幸福感を向上させたが、女性の場合にはコーピングを媒介して精神的健康に与える影響は認められなかった。次に、社会的評価状況および身体的脅威状況では男女共に自己愛人格傾向の高い者はストレスをコントロール可能と認知的に評価し、積極的な対処を行っていくことがわかった。つまり、全般に自己愛人格傾向の高い者はストレスに遭遇した場合にストレスに積極的に関わっていくことが認められた。しかし、男性の場合積極的に対処を行っても、社会的評価状況では精神的健康への影響は認められず、身体的脅威状況では抑うつを高める可能性も示唆され、自己愛人格傾向の高い男性にとってこれらのストレス状況が対人ストレス状況よりもよりストレスフルであることが予測された。女性の場合には対人ストレス状況ではコーピングの媒介過程が認められず、社会的評価状況および身体的脅威状況では異なるストレスにも関わらず、同様のストレス過程が認められた。この点については、対人ストレス状況において認知的評価を測定していないために言及できる範囲は限られるが、自己愛人格傾向の高い女性のストレス過程は状況によって変化しない可能性が示唆され、コーピングの柔軟性という点で男性に比べて乏しい面があるのかもしれない。つまり、本章からはコーピングの行い方やストレス過程が自己愛人格傾向という人格特性によって影響を受けていることが明らかとなった。

最後に、第6章では第1章で提起した問題について、第2章以降で検討した実証研究の成果をまとめ、得られた知見を生かした実用可能な介入についての展望を行った。

以上より、本研究では様々な変数と自己愛人格傾向との関連を検討し、より自己愛人格傾向のパーソナリティ構造を明らかにし、そのストレス過程を検証してきた。横断的研究からはほぼ一貫して自己愛人格傾向が直接的に精神的健康を高めること、ストレスの少ない状況では自己愛人格傾向の低い者や平均的な者に比べて最も精神的健康状態が良いことが見出され、自己愛人格傾向の精神的健康を支える働きが認められた。その一方で、ストレスの多い状況では最もストレス反応を示しやすく、自己愛人格傾向はストレスに脆弱な素因とすることができる。即ち、ストレスに脆弱な自己愛人格傾向の高い者が、病理性の高い自己愛性パーソナリティ障害に進展しないためにも、より精神的健康をコントロールすることが重要になってくる。本研究では3つのストレス状況を設定したにも関わらず、自己愛人格傾向の高い者は全ての状況をコントロール可能と認知し、積極的にストレスに関わって対処しようとする特徴が認められており、自己愛人格傾向の高い者の柔軟性の乏しさが示唆される。そこで、認知療法的なアプローチによって、自己認知やストレスの認知を修正し、自己愛人格傾向の高い者のストレス耐性を高め、より精神的に健康に生きていくことが可能になるかもしれない。今後はこれらの研究成果を生かし、自己愛人格傾向の高い者への介入を検討していくことが望まれる。